

【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

外国人を対象とする日本文字学習の枠内で書道教育の導入、指導方法とその特徴について
京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程1年 NAZAROVA Ekaterina
(ナザロワ・エカテリナ)

目 次

はじめに	108-109
当論文の仮説と目標	109-110
I 外国での日本語教育における日本の文字に対するアプローチとその課題； 外国人に書道教育を導入させる必要性とその根拠	
1.1 日本語教育の枠内で文字に対する姿勢とその課題	110-111
1.2 外国人に書道を	111-112
II 日本における書道教育の現状	
2.1 義務教育における書道教育。高校・大学・社会における書道教育	112-113
2.2 日本における書道教育に対する外国人の感想	113-114
2.3 書道、書写、お習字、書？	114
III 外国人に対する書道教育：存在するところ、実際に外国人に教えた指導者の声、 その資料、現状、課題について	
3.1 外国人に対する実際に行われている書道教育の現状	114-116
3.2 資料について	116-118
IV 日本人と外国人に対する書道教育の比較	
4.1 誰に教える、何を教える、何のために教える、どうやって教える？	118-119
4.2 外国人に書道を教えた経験から	119-121
4.3 外国人に対する指導する時の注意点について	121-123
V 毛筆の入門、硬筆の入門	
5.1 仮名の文字はどうして難しい？ 平仮名を教えるときの注意点について	123-124
5.2 毛筆の入門	124-126
5.3 硬筆篇：美しい文字を書くのを妨げるもの、その克服の指導	126-127
5.4 硬筆の学習手段をめぐって。みんなの日本語初級 I 漢字について	127-133
5.5 決めた内容を留学生に教えてみて気付いたことについて	134-135
まとめ	135
参考文献	136
資料	136-142

はじめに

さまざまな分野で国際化が進む日本において、いま外国語教育が注目を集めている。100年以上前には鎖国状態にあった日本だが、いまではさまざまな分野で海外に進出し、積極的に活躍するようになった。それにつれて日本独特な文化も国境を超えて外国で知られるようになり、ブームまで引き起こすようにもなった。日本料理や着物、祭りなどをはじめとして、現代の若者文化やアニメなどに関して、いまや世界中の人々が興味津々である。当然、日本語の勉強にも魅力を感じ、実際に日本語の学習を始める人が少なくないであろう。

昔からさまざまな交流があった故に言語構成では共通点の多いユーラシア諸国（特に欧露）の言語に比べて、日本語は他の言語との共通点がほとんど見られない。そのため国際的に見ればいささか「特別の言語グループ」に入っているといえるだろう¹。つまり日本語はかなり稀な独立した言語であり、その学習は外国人には決して容易なことではない。特に文化面においてもまったく共通点がないといっても過言ではない西洋人にとっては、まことに理解しがたい言語である。

日本語学習における一番大きな壁になっているのは何かというと、やはり文字であろう。日本の文字体系はアルファベットなどとはちがいで、漢字、平仮名、カタカナをまじえて使うという面でかなり複雑であるため、外国語として習う人にとって、日本の文字は大きな障害となっている。日本の文字は独特で、概念が分からない・形が難しい・それに漢字の読み方がたくさんあるなどの問題が生じる。また漢字は中国から伝わったものの、中国と使い方も読み方も形もちがうので、かなり理解しがたいものである。

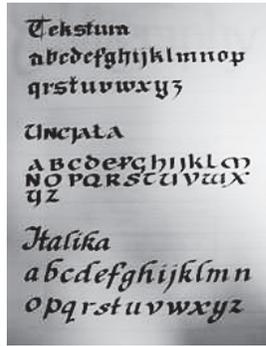
日本語を学ぶ外国人にとって、すべての学習の基本にある「文字」を理解するのは大変であるにもかかわらず、日本の文字学習における特別な対策はこれまでほとんど見られなかった。むしろ教える側は日本の文字をアルファベットのように扱い、短時間で覚えさせ（特にひらがな、カタカナ）、すぐ次のパターンに移りがちな傾向にある。またそれぞれの文字を美しく書くという視点もまったく見られない。

ひらがなとカタカナを覚えるだけでも苦勞し、さらに漢字があまりにも複雑であるため、漢字の学習を敬遠し、ひいてはしだいに日本語の学習に消極的になっていく外国人は少なくない。この点に関して、日本の文字学習のための新しいアプローチが必要であろう。

そこで日本の文字を扱う書道の文化と、同じく文字を扱う日本語学習を結びつけたら、効果的なアプローチができるのではないかと予想した。理由は以下の通りである。

まず外国人は「書道」という言葉を聞いて何を思い浮かべるだろうか？ 西洋人の場合なら、**Calligraphy** といえば中世から伝わってきたヨーロッパの硬筆の例を思い浮かべるだろうか（次頁の図を参照）。左：ポーランド人の留学生によって書かれたヨーロッパの硬筆の例；右：著者の臨書（蘭亭の序より）

1 日本語は琉球語と共に主に西アジア、中央アジアから北アジア（中央ユーラシア）の諸民族の諸言語であるアルタイ諸語の一つであるという仮説があるが、未だに公認されていない。



また硬筆ではなく、筆と墨で書かれた物だとつけ加えたら、まちがいなく中国・日本ならでは毛筆と墨を使った優雅な芸術のイメージが強くなる。書道は外国人にとって不思議な文字表現であり、謎めいた存在で、魅力的には感じられるものの、しかし実際に体験できる機会がほとんどない。

しかし外国の文化を学ぶには、その国の文化に触れる機会が必要であることはいうまでもない。日本語の勉強をするかたわら、日本の書道に触れる機会があれば、日本のユニークな文化に触れることができる。それに漢字仮名交じり文という複雑な書式に対する理解も進み、日本語の勉強に対して全体的にモチベーションが上がることを期待できる。つまり日本語学習プロセスに書道（毛筆・硬筆）を取り入れることによって、字を美しく書くことを求めると同時に、日本語の上達が早まることは確実である。実際に外国人に日本文字（ひらがな、カタカナ、漢字）を教える段階で書道の授業も実践できたら、以上に述べた学習上の課題を克服できるにちがいない。

さらに筆文字の世界に触れることが、文字を大事にする日本文化の素晴らしい世界に入り込むための入り口になるのではないかと考えられる。たとえば平仮名を勉強するきっかけとして仮名の起源をたどれば、『万葉集』や『古今集』などの世界が広がってくるし、結果として日本語学習が全体的に面白くて楽になることを期待できるであろう。

まだ日本語を勉強していないが、日本に興味を持っている外国人にとっても、書道を通して日本文化と接するのはいい機会であるし、日本語の勉強をはじめるといい刺激になるかもしれないので、当研究の結果が役立つのではないかと考えられる。

本文に入る前に、当論文での書道教育該当者は日本語を外国語として勉強している大人の外国人（高校生以上）を対象としていることを断っておきたい。

本論文は、特に外国人に書道を教える際の指導の特徴に着目して、文字学習を「苦手」から「得意」にするために外国人の美意識、考え方の特徴を活かした書道レッスン指導の対策を練ることを目標とする。

当論文の仮説と目標

日本における書道教育の概念を理解した上で、外国人に対する書道教育の現状を調べ

る。調べた情報を基礎として、日本語を学ぶ外国人のために硬筆篇・毛筆篇に別け、書道教育の概念を構築する。日本語教育の段階で言葉・漢字を学習する中で書道教育を導入させ、以下の成果を期待する。

- ・文字を大切にできるようになり、普段、美しく書けるようになる
- ・日本文化に興味が深まり、日本語学習全体にモチベーションが上がる
- ・漢字仮名交じり文に対する理解が進み、苦手意識が和らぎ、日本語が学習しやすくなる

以上に述べた学習効果を狙い、実践できるように対策を練るのが当論文の主な目標である。

研究のプラン

- I 外国での日本語教育における日本の文字に対するアプローチとその課題；外国人に書道教育を導入させる必要性とその根拠
 - II 日本の現代教育における書道が占めている位置について調べる
 - III 外国人を対象とする書道教育:存在するところ、実際に外国人に教えた指導者の声、その資料、現状、課題について調べる
 - IV 日本人向けと外国人向けの書道指導の比較；実際に外国人に教えた人の経験と自分自身の奈良教育大学で得た経験、留学生に書道を教えた経験によって得たデータを踏まえ、指導のアプローチを考える
 - V 毛筆篇：特に仮名に注目させ、毛筆入門をさせるための指導対策を練る；硬筆篇：書く内容を親しみやすくするために選び抜き、美しい字を書けるためのコツを徐々に取り上げていく；毛筆・硬筆篇でよく起きる困難、その問題の克服案を考える
- まとめ：当論文の仮説が正しいかどうか；目標はどれぐらい達成できたかについてまとめる

I 外国での日本語教育における日本の文字に対するアプローチとその課題；外国人に書道教育を導入させる必要性とその根拠

1.1 日本語教育の枠内で文字に対する姿勢とその課題

現在、外国²で行われている日本語教育に関してもっとも気になっている課題は、基本的な学習に重点をおいているため、文字の美しさや文字に関して調べたり、勉強したりする余裕がないことである。

漢字は表意文字であるが、その本質（構成）を完全に無視して、ユーラシアや米国でお馴染みのアルファベット扱いられているようだ。アルファベットは、ひとつひとつの文字が原則としてひとつの子音または母音をあらわす表音文字である。一つの音価を表記する音素文字であるアルファベットに対し、漢字は通常、一つの意味（形態素）と一つの音節を表す。一字が一義を表すことだけが重視されてきたが、これは古代中国語の一音節が一つの意味を表す孤立語的な言語構造に由来するのであって、正確には音と意

2 主にロシア

味の両者をあらかず表語文字である。つまり一字が一語を表しているということになる。アルファベットと漢字（ひらがなの字母が漢字にあたるためひらがなも含む）は根本的にちがう文字体系であるが、日本の文字を学ぶプロセスに関しては、カード式などの英語学習と似たようなやり方しか浮かばない（カードで書いてある文字を見た目の通り暗記する）。

今までゼロから日本語を学び、文字に関する情報と文字を美しく書けるようになる参考書を地元ロシアの図書館や日本センターなどで探してきたが、文字の美しい書き方にあたる資料の少なさにはかなり大きな不満を抱いてきた。そして「文字がきれいだけでなく、外国人は適当に書けたらいい；それ以上こだわる必要はない；時間の無駄；時間をかけるなら、新しい言葉を勉強した方がいい」という先生の文字学習に対する立場と、文字を書くこと自体をいやがっている同級生たちの意見には納得できなかった。資料を探しても母国語できちんとしたものが手に入らなくて困っていたことと、他にも日本の書道と日本文字のことをもっと知りたくて、文字を美しく書きたいのに、資料の乏しさに悩んでいる外国人がいるのではないかと予想した。

日本語教育においては、漢字仮名交じり文の特徴にもっと注目すべきである。自分の経験から自分自身が受けてきた日本語教育を振り返ってみると、日本語教育における文字は実用的な視点でしか見られていないような印象が強い。例として何カ国かでよく使われている、「みんなの日本語シリーズ」の『みんなの日本語初級Ⅰ』³という教科書を、漢字学習の代表的な参考書として紹介していきたい。

簡単にその教科書の内容を分析すると、以下のことが分かる。

文字を美しく書くことよりも、筆順を正しく整えて書くことが重視されているが、そこに手書きの文字が載っていないことが非常に気になる。書く練習のための空欄でも、拡大された活字が載っていたり美しく書くためのコツなどに関する説明がほとんどない。また漢字が出てくる順番も、文字の構成からみると不自然であり、文字自体についての説明も、成り立ちや構成、歴史の部分で物足りなさを感じる。つまりその教科書では文字は記号・形ではなく、文法篇で出てくる単語に沿って出てくる順番になっている（音楽→音 楽）。言葉の使い方が重視されていることが明らかである⁴。

1.2 外国人に書道を

私がロシアの大学で日本語学科に在籍して日本語を学んでいたときに交流によってこられた日本人の学生から書道を紹介されたとき、毛筆で書かれた美しい曲線と筆の動きに目が奪われ、とても新鮮で面白く感じ、日本文化や日本の文字や書道のことをもっとよく知りたいと思った記憶がある。日本の書道について知ったころ、毛筆で絵を描くのと文字を書くのとはどうちがうのかといったことや、中国の漢字、書道と日本の漢字、書道との相違点などについて疑問がたくさんあったが、しかし身の周りには資料がなく、また答えてくれる専門家もいなかったため、それっきりとなっていた。

3 新矢麻紀子、高田亨、古賀千世子、御子神慶子 1993『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネットワーク

4 詳しい分析について当論文の5.4を参照

だが実際に筆と墨を使い、もともと筆で書かれていた文字（漢字・仮名）を毛筆で実際に書いてみれば、日本の文化をもっと身近に感じられるのではないだろうか。毛筆により生まれるさまざまな線質の表現を体験すれば、文字の美しさを鑑賞しながら学べるはずである。

普段気軽に使う硬筆（ペンや鉛筆など）でも充分美しい文字を書けるようになる。また手本がなくてもきれいに書けるようになるのが目標である。毛筆はともかく、硬筆で美しい文字を書けるように心がければ、外国人に対する日本語教育も変わるかもしれない。文字学習の時に実用的な面だけでなく、美的感覚をも視野に入れば、全体的にバランスのいい日本語教育をおこなえるのではないだろうか。

外国でおこなわれている日本語教育について、文字に関する視点やアプローチを考え直す必要があると私は考える。そこには表意文字の扱い方や文字の基本的な書き方と文字についての説明を加えるべきであろう。そして日本の文字の美的な面を正面からうけとめることで、日本語の学習をより豊かで面白くしてくれる見方にするべきではないか。

II 日本における書道教育の現状

2.1 義務教育における書道教育。高校・大学・社会における書道教育

日本には外国人に書道を教える特別な方法や決まった制度がないことが分かって、私はとりあえず現代の日本における書道教育について調べることにした。結果は以下の通りである。

「お習字」は「書写」と呼ばれ、国語科の勉強で文字や記号を正しく整えて書くことが目標とされる。小学校ではかな文字のほか教育漢字を 1006 字読み書きできるように学習することと決められている。

小学校へ入学すると、1 年生でまず 45 文字（んを除く）の平仮名やカタカナを習う。漢字も 80 字（資料）習うが、用具は鉛筆などが主で、いわゆる硬筆書写である。2 年生になると、漢字は 200 字に増える。

3 年生になると、毛筆書写も始まる。ただし伝統的な毛筆書法を学ぶのではなく、トメ・ハネ・ハライ・オレ・マガリなどの硬筆書法の基礎を確かめ理解しやすくするために毛筆を使ってみるのである。6 年生まで、国語の学習時間のうち週に 1 時間の書写学習が学習指導要領で決められている。

教育漢字は 6 年間で 1006 字を読めるようにとされるが、そのおおよそを書けるようになるには中学 3 年までの猶予がある。

中学校では 1 年生で週に 1 時間、2 年・3 年では年間 15～20 時間程度となっているが、2 年・3 年で国語の時間を書写にあてているところはほとんどないという⁵。

高等学校では芸術科に音楽・美術などと並んで、書道が選択科目として配置されている。大学では教育学部や文学部を置く大学に書道に関する講義が設けられている。特に各県に設置されている教員養成系の教育学部では、書写教育・書道教育の研究室が置か

5 松本宏揮 2006『書法教育の実践』共同精版印刷株式会社 12-13 p.

れるところがある。

新潟大学、筑波大学、東京学芸大学、静岡大学、京都教育大学、奈良教育大学などの国立大学では、書道に関する学科・専攻・学群・コース・領域が置かれ、大学院も併設し、有為な指導者の育成を目指している。筑波大学と東京学芸大学、横浜国立大学、千葉大学、埼玉大学の4校からなる東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科（連合大学院）には、博士課程（教育学博士）も設置されている。

私立大学では、大東文化大学で書道学科、四国大学で書道文化学科を開設し、書家や教育者の本格的養成に努めている。なお両大学は大学院にも書道に関する専攻を設置している。学校機関以外に書道の学習できる所といえば、子供向けのお習字教室（毛筆、硬筆）をはじめ、年齢を問わず入れる生涯学習機関などでさまざまな教室が設置されている。

2.2 日本における書道教育に対する外国人の感想

日本の教育制度のなかでの書道教育の現状に実際に触れてみたら、実に衝撃的であった。何が驚いたかという点、毛筆の練習は小3から始まることであった。それにその内容は芸術的な表現ではなく、硬筆書法の基礎、つまり書写であること。書道らしいものはようやく高校の選択科目となっているのも、私には意外であった。外国人からみれば書道は伝統的な芸術であり、学校の義務教育では必ず必修科目に入り、日本人の子どもは全員小1から毛筆で美しく字を書くための練習をするのが当然だ、というイメージが強かったので、現実の意外なありかたにかなり驚いた。さらに大学にはどんな大学にも書道科があると思っていたが、それは教育学部や文学部、教員養成機関の教育学部に限るようである。近頃は書道は受験の範囲に入らないため、教えない学校もあるそうである。

社会人になってからも、職業は書と関係がなくても書道が続けたい人が、師匠に付いて展覧会活動をやっているようである。学校で重視されなくなりつつあり、さらに書道に直接の関係がある就職も難しいということにも驚かされた。書道科の学生の多くは国語の免許を取得し、国語教師をやりながら、書写の授業を担当したり、高校の選択科目の書道を担当したりする例が多い。逆にいえば日本における教育制度では書写は国語の一部になっていて、小中学校では書道経験の有無に関わらず国語の先生が書写を教えている。書道の経験がほとんどない国語教師が書写を教えなければならないということも不思議に思えた。母国ロシアの教育例を挙げてみると、小学校でも専門知識が必要とされている科目の場合（英語・音楽）は担任ではなく専門家が担当している。

日本にはせっかく素晴らしい芸術がある。しかし実際にはパソコンなどを使って情報を伝達する機会が増えていて、一方で現代では手で文字を書くことや書道の存在が重視されていないことを、私は何よりも不思議に思った。数年前までは筆で書いて送ることが当たり前だった年賀状でさえ、最近はパソコンで製作されるようになってきた。

日本の書道について以前に持っていたイメージは、現実とはかなり大きくかけ離れていて、厳しい現状であることが分かった。日本の書道教育の現状についての私の知識不足から起きたかんちがい解けたら、私はあまりにもイメージとちがう、盛んではない書道教育の様子を目にすることとなった。受験勉強の関係で学校の授業から重視されな

くなっている選択科目である音楽、美術、書道は、本当に日本人にとっては必要でないのだろうか。極端に言えば日本人でも書道をする人が減少傾向にあるため、このような状況において日本における外国人のための書道教育が成立するのだろうかという疑問さえ感じられる。

2.3 書道、書写、お習字、書？

日本では書道を意味する呼び方がいくつかあって戸惑いを感じた。それで詳しく調べてみたら、以下のような解説があった。

「書道」という名称が今の日本においてはもっとも一般的であるが、しかしこの名称は日本独自のものである。中国では「書法」と呼び、「書道」という名称はない。また書道は自由に個性を尊んだ世界であるという意味で、芸術としての意識を強調した場合には、あえて「道」をつけずに「書」あるいは「書芸」と呼ぶこともある。

明治になって、毛筆による「書き方」が「習字」と呼ばれるようになった。こうして小・中学校（6歳～13歳）で「習字」の授業がおこなわれた時期が長かったため、今も日常的に「おしゅうじ」という呼び名が継続して使われている。特に子供や初心者が親しみを込めてそのように呼んでいる。他にも「書写」や「かきかた」という呼び名があるが、この場合は芸術的な鑑賞の対象というよりも、正しく、速く、整えて書く練習、という実用的な意味を多く持っている⁶。

書道と書写の共存について知ったとき、私はかなり戸惑いを感じた。毛筆で書く行為はすべて書道であるという今までの思いこみのせいであろうか、両者がどちらがうのかなかなか理解できなかった。

美的感覚からいうと、日本に来る前には活字による印刷しか見たことがなかったため、毛筆で書かれてよく整っている書写の字はかなり美しく見え、難しそうな行書、草書などよりも、自分で書けそうに思えて魅力的であった。同じように思っている外国人はきっと少なくないであろう。

Ⅲ 外国人に対する書道教育：存在するところ、実際に外国人に教えた指導者の声、その資料、現状、課題について

3.1 外国人に対する実際に行われている書道教育の現状

日本は外国人留学生を多く受け入れているため、外国人が集まる施設もそれなりに整っている。いわゆる「日本文化センター」や「国際交流センター」、あるいは「姉妹都市文化会館」などがそれで、全国に数多くある。そしてそのような場所で外国人に対する日本語教室が開かれたり、日本人や他の外国人と交流したり、日本文化を紹介するなどのイベントが頻繁に実施されている。こういう施設での外国人を対象とする書道レッスンは珍しくない。もちろん場所によって内容は異なるが、しかし共通する部分もたくさんある。そこでは基本的に、担当の先生の指示に従い、用意された書道道具を使って、決められた時間帯に作品を制作するというパターンが多いようだ。

6 福光敬子 2005『留学生のための書道 入門篇』大阪外国語大学 p. 4

留学生（外国人）の場合、そういう場所で行われるレッスンを通して日本の書道文化に触れ、実際に形として残る作品を作れるから、非常にいい体験ができる。しかし参加者の外国人はそれぞれ留学期間や滞在期間、あるいは日本語能力などが異なっているから、より多くの外国人に体験してもらえるようにとの配慮から、レッスンはだいたい一回限りとなってしまう。

そこでは日本語の勉強の一環として続けて書道を習得するという認識が存在しない。また外国人が体験的な授業を受ければ、その後の継続がなくてもそれなりに満足してしまうものだ。なぜなら一時間前後で書道の世界をすべて紹介するのはどうも無理なことであり、書道とは筆を持って先生が書いた手本を見ながらその通りに文字を書くこと、というイメージが強いので、それ以後も続けたいという気持ちがわかないであろう。



大阪府大阪市国際交流センターにて 著者（左端）がアシスタントとして参加した福光敬子先生による外国人のための書道レッスン

書道コースがある日本の公立大学では、外国人留学生も書道の授業を受けることがいくらかは可能である。奈良教育大学では外国人留学生専用の授業は設置されていないが、担当教員に許可を得れば、日本人学生とともに書道の授業を受けることができる。「書法に親しむ」という書道科以外の学生を対象とした授業の場合は日本人と同じ内容を実習するという形式になっているが、しかし書道科の学生を対象として開講される授業となれば、技術や基礎知識、目的などが専門的な分野になるので、担当教員が外国人留学生のレベルに合わせてプリントを配ったり、指導したりするという形式になっている。しかしそれは日本人学生の授業の時間帯に実施されている指導なので十分といえない部分が多い。実際に留学生がその理由でやめてしまうこともあった。

以上のことをふまえれば、大学が抱えている課題として、毎年かならず書道に興味を示し、やりたがる学生がいるにもかかわらず、留学生専用の授業が設置されていないという問題が指摘できる。

他に留学先の大学で書道の授業を受けられる組織を挙げると、外国人専用の日本語の

クラスなどが設置されている大学付属の留学生センターになる。たとえば、元の大阪外国語大学⁷である。

他に国際交流会館のような所でも月謝を払えば個人的に書道を習うことが可能であるし、たとえば外国人のための書道教室「虎空」のような外国人専用の組織もある。「虎空」はビジネスや留学で日本に在住している外国人とその家族や友人を対象とした外国人専用の書道教室であると、幅広く外国人にアピールしている。そこで教える内容については、以下のようにHPに述べられている。

「単に筆を持って書を書く事だけを指導するのではなく、折に触れて、文字の成り立ちや意味、書の歴史・時代背景なども一緒に学んでいただけるようなカリキュラムを用意しています。同時に、書道以外の日本文化も伝えていければと思っています。」⁸

さらにまた次のような書道特別教室の情報もあった。「当教室は一般の書道の他に、左手で書道を学びたい方・英語で書道を学びたいという方を募集しております」⁹。

ところで外国人に書道を教えることになれば、やはり言葉の壁を乗り越えなければいけない。ある程度日本語を学んでいる人はともかくとして、日本語がまだあまりできない初級レベルの外国人の場合は言葉が通じないため、説明が分かりにくいであろう。指導者は日本語だけではなく、多くの国で通じる英語も話せたら、日本語がうまく話せない生徒との間にも信頼関係ができ、書道学習時間も充実するであろう。

私は今まで体験したパターンが二つあり、一つはほとんど日本語ができない外国人の集まりで、そこではグループに分けられ、指導者は日本語で話し、各グループに英語が話せるボランティアの学生がついていた（書道科の学生ではない）というパターンである。二つ目のパターンは指導者が日本語で説明してから通訳が英語に訳し実技にはいった。また各グループに書道科の学生がついていたが、英語は話せなかった。まとめれば、指導者が最初から外国語で説明すれば、説明にかかる時間を短縮させ、もっとスムーズに学習時間を使えたはずである。またアシスタントの書道科の学生も英語でサポートできたら、学習プロセスがよりいっそう上手くいくであろう。さらに日本語ができない生徒も質問しやすい雰囲気になるのは確実である。

3.2 資料について

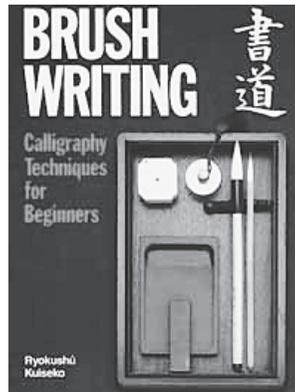
現在まで外国人専用の教科書は二冊しか入手していない。一冊はユジノサハリンスク市在日本センター（ロシア）で見つけた。“Brush Writing—Calligraphy Techniques for Beginners—”（Kodansha International Ltd., 1988）である。（次頁の図：当本の表紙）

本書には英文で道具の説明や古代文字の簡単な説明、それに文字を書く時の正しい姿勢の写真などが載っており、さらに筆で書く基本的な線の書き方の説明がある。横線、縦線、点、右・左払いの説明の後で基本的な線を含む「永」字の見本が載っている。後半は楷書で書かれている見本とその内容に合わせて書くポイントのアドバイスであり、その後に簡単に楷書以外の書体が紹介されている。

7 現在、大阪大学と合併して名前も大阪大学に変わった

8 <https://sv20.wadax.ne.jp/~tiger8-biz/class1/foreigner.php>

9 <http://www.toma-tenkoku.com/cgi-bin/toma-tenkoku/siteup.cgi?category=2&page=1> 京都府京都市伏見区掘詰町 533



全体的な印象はかなりシンプルで、情報も多くないが、書道と初めて接する人の場合なら逆に混乱せず、分かりやすく書道の世界に入門できる教材である。そして基本的な筆使いができれば文字を書けるようになるという印象があたえられ、学習者にもっと書道の世界を知りたいという欲求をいだかせる、かなりいい教材だと考えられる。

もう一冊は『留学生のための書道 入門篇』で、元大阪外国語大学（現大阪大学）の講師である福光敬子先生によって作られた教材である。現在は一般に公刊されていないが、英語に翻訳され、校内で留学生の授業の教材として使われているようである。教科書の構成は以下のようなものである。

- 同じ文章が日本語（右）と英語（左）で書かれてある
- 書道とは何か、書道の呼び名について
- 日本の仮名の説明：由緒、変体仮名、カタカナについて；硬筆のカタカナの練習の指導；平仮名の手書きと活字のちがいについて。字母と草書体の平仮名表
- 書道の用具の説明：筆、墨、硯、紙、下敷き、文鎮、筆置き、水滴、筆巻き、印
- 毛筆練習の用意：墨のすり方、正しい姿勢、筆の持ち方
- 仮名を書く：小筆の使い方、いろは歌、変体仮名
- 漢字を書く：篆書、隸書、楷書、行書、草書の説明；基本的な線の書き方の説明
- 永字八法：基本的な線を含んでいる「永」という字の書き方
- 作品の書き方：各書体に対して古典の文章の紹介、題材の選び方、落款、印、篆刻の説明

書道の世界に入るための最低限の情報が分かりやすく載っている。また英文がついているので、日本語がまだ苦手な学習者にも便利である。日本の文字（平仮名、カタカナ）の指導については字母表と筆順などが載せられていて、詳しくて分かりやすい。そしてアジア以外の国では見られない書道道具や筆の選び方についてもやさしく説明されているという長所がある。『留学生のための書道 入門篇』は留学生を対象として考えられたまことにユニークな教材である。

以上の参考書以外には、外国人向けの資料がほとんど手に入らなかった。インターネット上で検索すれば英文のものが出てくるが、表紙に書かれている字をはじめとして、内容がかなり疑わしい。

いっぽう外国人向けの資料が乏しい反面、日本人向けの参考書は非常に多く、専門的な物を除き、初心者向けのテキストにしぼれば、外国人の指導にも適用し得るのではないだろうか。たとえば各書体別になっている二玄社の書道入門シリーズの参考書である。仮名の場合、『かなのレッスン1～5』；草書の場合、『草書のレッスン1～3』¹⁰である。またDVDつきで購入することも可能なので、なお分かりやすいであろう。テキストの中身も、説明が長すぎず、簡潔で分かりやすい。そして説明されている字が大きく書かれて見やすい。

それ以外に外国人の指導に使えるテキストといえば、高校の書道教科書がよいであろう。古典の文章も多く紹介されている上に、書く練習のために古典から抜粋された部分が拡大されて見やすくなっている。またすべての書体が紹介されているので、興味をもてるし、書道入門として適当であろう。

しかし小学校の「書き方」や中学校の「書写（毛筆篇）」は省いた方がよさそうである。なぜかというと、書写の毛筆の字は簡単に見えるが、実際には筆使いが外国人にとってかなり難しい。また字形が非常に整っているので、小さなミスでも目立ってしまい、手本の通りそっくりに書けないことで絶望感が大きく、興味が無くなる可能性もある。実際に母国で書写の授業を受けたことがある留学生の声を聞くと、「あまり面白くなかった；興味がなかった；日本語の勉強の間、息抜きになっていたが、特に面白いと感じなかった；あまり書けなかった」という感想であった（A君、ドイツ；Lさん、ルーマニア；Mさん、ポーランド）。また書写と書道の区別が理解しがたいこともあり、書写を硬筆篇における指導に使えば誤解が生じずに済み、効果的であろう。

IV 日本人と外国人に対する書道教育の比較

4.1 誰に教える、何を教える、何のために教える、どうやって教える？

日本語教育の中で書道教育をおこなう場合、以上の教育学理論上でよく出てくる問題を解決しなければいけない。近年では日本語が学習される外国語としてだんだん人気があがっているため、大学に入学してから学習をはじめ人もいれば、小学校2年生から日本語を勉強しはじめる人もいるという現状がある。もちろん大人に対する指導は子供に対する指導とちがうので、当論文のターゲットグループの年齢も決めなければいけない。当論文の対象は、外国語として日本語を勉強している成人の外国人とする（高校生も含む）。

次に何を教えるかという問題であるが、もちろん日本語の文字学習の基本になる漢字仮名交じり文を勉強しなければいけない。つまり平仮名カタカナ漢字を学習することになるので、筆と鉛筆（硬筆）などの書道道具を使い、日本文字の基本的な書き方を教えることになる。

何のために書道を教えるのかという問題に入る前に、書道をやる日本人と外国人の目的（動機）のちがいを比較してみよう。

10 村上翠亭 1985『かなのレッスン1～5 入門編』二玄社；宮崎葵光 1986『草書のレッスン1～3 入門編』二玄社

そもそも外国人と日本人とでは、書道の世界を見る視点が異なっているから、学習する目的も根本的にちがうはずである。書道をやると日本人の一般的な流れの例では、小学校から中学校まで書道塾で習い、国語の授業の枠内で小学校から中学校にかけて書写を習い、高校で書道を選択科目として履修する。また書道部に入るケースが多い。大学の書道科に入学し、在籍しながら、展覧会活動をやる。卒業後、書道教員になり、高校で講師となったり、あるいは小中学校の教員として書写の授業を担当する。そして展覧会活動をやり続ける。一般に大学の頃から師匠がいて、社会人になってもずっと師匠の教室に通い、教えてもらっている形になる。

外国人の場合、書道と関わる就職がまずないため、最初から趣味の感覚でやることになる。「自分の文化にない優雅な芸術を体験したい」、「頑張って作品を書いて母国の人に自慢したい」という目的で書をやりたいがる人もいれば、「書をやることによって日本文化や日本人の心を理解したい」、「頑張って字を美しく書けるようになりたい」、「書に親しんで文字のことをもっと知りたい」と考えている外国人もいるであろう。以上の動機をうまく利用し、文字学習の中で書道教育を活かせたら、難しい日本文字に関して苦手意識を無くすなどの効果が期待できるであろう。

最後に一番難しい問題、すなわち「どうやって教える」である。外国人を対象とする書道教育の実践は「暗中模索」状態であると考えられる。実際におこなわれている場所は数多くあるが、しかし一定の教育方法や理念が見られない状態なのである。それゆえ私は自分の経験や先生方の助言を元に提案するほか無いと考え、自分なりの試行錯誤であることは覚悟したうえで、日本語教育における文字学習の枠内で外国人に対する書道教育を次のように考えた。

4.2 外国人に書道を教えた経験から

2008年に奈良教育大学において、書道を専門的に学ぶコースの学生と大学院生により、書道授業を海外にて実践しようとの目的のもと、有志によって「YAMATO」というチームが作られた。それは学部生4名と大学院生4名、合計8名からなり、さらにOB 2名と引率教員2名が同行していた。

メンバーは日頃から書道を学ぶことに喜びや楽しみを感じており、それを世界の人たちに日本の伝統文化である書道を伝えたいと思ってオーストラリアへ行く企画を立て、実際に書道授業を実践してきて、報告書にまとめた。

オーストラリアで書道指導をおこなう目的は以下のようである。

- 日本の伝統文化である書道を広める
- 漢字文化圏ではない外国人向けの指導方法を学ぶ

また、書道指導の内容として、主に次のことをしてきた。

1. 小学校にて授業
2. 大学で授業の補佐とデモンストレーション
3. 日本語学校にて授業補佐¹¹

11 Project YAMATO 2008. 2008『奈良教育大学 平成20年度学生企画活動支援事業プログラム Japanese Calligraphy in Melbourne 外国人への書道の指導 報告書』

比較をしやすくするために、実際に外国人に書道を教えた学生の助言を集め、気になる部分について答えてもらって分析を試みた。

チーム YAMATO の答えから：(小学校も含む)

1. **教えた内容、またその中で一番興味を示されたのは何か？** 固形墨に興味を示しているようだった。書く言葉の意味を知りたがっている児童もいた。書くこと自体に興味を持っていた。墨をすることに興味を持っていた。外国のことばを外国の筆記具で書くという、珍しい体験。墨をすっているときは皆とても楽しそうだった。基本点画の練習よりも、各自が選んだ文字を書いている時が一番楽しそうだった。筆にたっぷり墨をつけて思いっきり書いている時。たくさんの枚数を書くことができたこと；自分なりに「うまく書けた」と思ったときの達成感。
2. **指導の時に一番困ったことは何か。それをどう克服したか。** 縦の線や左や右はらひでの筆使いと形のとり方に苦戦していたようで、指導が難しかった；書き順のことなどをいうと、とても難しそうにしていた。二度書きをしてはいけないことが理解しにくいようだった。書き順通りに書くことがなかなかできない生徒もいた。左利きの生徒がとても難しそうだった（対策→左利きの児童は左手でそのまま書かせてしまったが、左から右へ書く線が多いので、余裕があれば右手で書いた方が書きやすいことを伝え、右で書かせてみても良いと思う。最終的にどちらで書くかは本人で決めるようにする。教える日本人側の語学力が低いので、質問しても会話が成立せず解決しにくいこと。これからの活動では上手くいかなかった指導方法を反省し、今の経験を活かせようと頑張るそうである。自分たちにとって当たり前のことが彼らにとって当たり前でないということが多々あった。たとえば、手本を左に置いて右に自分の書く半紙を置く。一枚書き終わる。その後にもまた二枚目の半紙を置く。私たちは何もいわれなくてももう一度同じ字を練習する。しかし彼らは、もう一度同じのを書くの？と質問をする。同じことを何度も何度も練習することに少し疑問があるようだった。
3. **指導の中で、一番リアクションがよかった指導方法は何か。** たくさんの書体の見本を用意すること。授業のスタイルの自由度が高いことは意外だった。私たちは「教えられる：教わる」という受動的なものであったが、自ら「学ぶ」という能動的なスタイルを小学生のときから身につける「教育」なのだということに気づいた。日本の小学生よりは、積極的に何にでも興味を持ち、口にしているように感じた。筆で文字を書くことに違和感をもっと持つのではと想像していたが、違和感なく、楽しんでくれていたことが嬉しい驚きであった。前向きにものおおせず授業に参加する子どもたち。書く時の二度書きが多かったこと。書道をまったく知らない人に書道を教えることの難しさを知った。自分にとって当たり前のことでも相手にとってはそうではないことがたくさんある。筆の持ち方、墨のすり方、用具の名前など改めて自分自身も見直すいい機会になった。
4. **日本人に対する指導とどうちがっていたか。どこが意外だと思ったか。** 指導の際に相手をほめることが大切だと実感した。英語に関して点画の線の名称よりも、線の動き、たとえば「持ち上げる」や「だんだん太く」などといった説明の方が大切だと感じた。違和感のないようもっとテンポよく英語の説明ができなければいけな

いと感じた。書道は二度書きをしてはいけない。一回性の芸術だという説明を入れたらよい。大きな声で元気がありよかった。次からは通訳がいらないように準備しておけばいい。

5. 外国人に教えた時にどんなことを心掛けていたか。それはどうしてか。（初めての経験なのでまだ対策をあまり立てていないようである）
6. 外国人に教えてみた、全体的な印象について。 小学校での授業はとても新鮮であった。何より子どもたちが熱心に書道をしている姿がとっても印象的で、やらされているという感じはまったくなく、全員が積極的に授業をうけてくれてとても教え甲斐があった。

4.3 外国人に対する指導する時の注意点について

以上のデータによれば、日本人指導者の目には外国人の生徒がとんでもない行動をするように思われたようである。日本人の一般的な生徒と共通する困難もあれば（縦線や左右のはらい；筆使い、形のとり方に苦戦していた；左利きの生徒が書きにくそうだった）、外国人ならではの意外な困難やかんちがいも数多く生じたようである。その外国人の筆で字を書く様子の特徴、その癖が生じる理由と、それに対応する指導の提案をまとめてみた。

私自身も外国人として書道を学んだ経験があり、世界中の国々からやってきた外国人留学生と交流したり、書道を教えたりする中で、外国人が日本人とまったくちがうビジョンを持っているので指導する時にその外国人の受け止め方を意識しないといけないと判断した。また外国人ならではの見方、書き方、思想、癖などを上手く利用すれば、お互い満足できるような学習プロセスをおこなえるのではないかと予想した。今までに気づいた、書道に関して外国人である故の意識を持つ留学生の特徴をピックアップしてみた。個人差もあり、国によって相違もあるが、共通点は以下のようである。

特徴1：美術が盛んであるヨーロッパ/ロシアの留学生は審美意識が高く、書道を芸術の一つとして見ている。そしてそれゆえに臨書に対してはいささか苦手である。なぜかという美術の世界では自分の作品を作る時に模倣をすることは御法度であり、どうしても高い評価が得られないためである。また同じ理由によって、臨書をさせてもそっくりと書こうとしないので手本をあまり見ないという傾向が見られた。

指導の提案：最初は臨書をさせず、自由に書きたいものを選ばせて書かせる。また参考書を見せたあとに手本を取り上げ、自分のイメージで書かせた方がヨーロッパ人の気質にはあうであろう。それから十分に筆などになれ、書道を続ける気持ちがあれば、臨書に挑戦させればいだろう。

特徴2：二度書きはいけないことだと分からない。なぜかということ、書道を美術の感覚でやり、絵画の世界では色の層を重ねたりして作品を仕上げるのは当然なことで、文字を書く時もそういう風に失敗したところを「飾って」しまう。また、注意されても「二度書きをしても、訂正したところが目立たないから、ばれなければ大丈夫」と考える意識が働いている。

指導の提案：書道は「一発勝負」の芸術である。一回しか書けないから美しいのだ、と納得させることが必要である。外国人はそのような日本独特な考え方が入っている文章

に興味をもつので、納得して頑張る気持ちになるであろう。

特徴3：字を書いている時に自然に湧いてくるコミュニケーションの中で、書道・文字に関するまだ知らない情報について触れると、興味津々の様子を示して説明を求める。またその説明の中で何か疑問に思うことがあれば、議論したり、後で自ら調べたりするようである。

指導の提案：新しい知識を求める好奇心に応じて、毎回少しずつ書道に関連する情報をあたえれば、さまざまな知識を身につけながら進むであろう。日本人とちがって外国人の場合、書道に関する常識がゼロに近いので、教えなければならないことがたくさんある。

特徴4：以上に述べたように外国人は知識欲が強いので、同じことを何度も練習することに疑問をいだきがちである。同じものを書くのが面白くないということもあるが、筆で字を書くことに慣れていないこともあり、集中力が続かなくて同じものを何度も書かせたら、しだにおかしくなって、最後には嫌になった留学生もいた。

指導の提案：できるだけさまざまな教材を用意すること。また一番書きたい字を選ばせ、いろいろな書体を書かせてからまたその字に戻るといった方法が適当であろう。とにかく同じものを何度も書かせないことである。

特徴5：ほとんどの外国では文字を横書きに書くため、縦書きが苦手である。結果として中心が揃えにくく、うまく書けない。また縦に文字を配る時に感覚があまりなく、バランスが悪くなる。

指導の提案：中心が分かるように下敷きに線を書くなり、紙を折るなどの工夫が必要である。中心を揃えることは外国人に難しいことを意識しなければならないであろう。

特徴6：楷書以外の書体が読めないで、他の書体に対して苦手意識があって、あまりやりたがらない。手本を見て書いても筆法の特徴が分からないため、うまく書けなくてがっかりする。

指導の提案：外国人は概してプライドが高いので、がっかりさせない指導が必要である。楷書以外の書体を紹介する時には、なるべく書きやすい文章を用意する必要がある。たとえば草書を導入する時に現在の平仮名の形になっている字母を紹介すれば勉強になるし、草書に関する苦手意識も和らげられるだろう。篆書の場合なら動物の絵を思い浮かべられる象形文字を選べば、古い書体であることも頭に残り、逆筆を教えたなら楽しく書くのではないかと考えられる。

特徴7：文字を書く時にどんな字でも無意識に四角（ノートの升目）に入るように書くようとしている。結果としては字の形がおかしくなる。

指導の提案：なるべく形がちがう字を集め、それらのちがいに気づかせることが効果的であろう。さらに自分で書いた文字の上に丸、三角、菱形、四角などを色鉛筆で引かせたらなおよいであろう。

まとめれば、日本人に比べて技術的な面で外国人はレベルが劣っているが、その代わりに学習に対するモチベーションが高く、興味が続く限り常に知識を求めているようである。逆に興味が薄れがちになれば、コツコツとやらず、やめる人が少なくない。また4.1項に述べたように日本人に比べて書道をする目的もちがいで、日本文化が誇る書道に対する見方もちがうので、当然、指導に際しても相手は一般的な普通の日本人とち

がって外国人であることを必ず考慮しなければならない。

V 毛筆の入門、硬筆の入門

5.1 仮名の文字はどうして難しい？ 平仮名を教えるときの注意点について

外国人は日本語を勉強しはじめるときに、最初に平仮名を習う。彼らはそれを曲線が多く不思議な文字だと思うが、あたかもアルファベットのように、形をひたすら覚える。いっぽう教える側はできるだけ早く文字を覚えさせ、早く単語や文法の説明に移りたいと思いがちである。確かにロシア語などのアルファベット言語の場合には筆記体の書き方があるが、ブロック体の文字はあまり変化がないので、文字の起源を説明する必要は特にない。しかし日本の文字体系は複雑であり、アルファベットとまったくちがう要素でできているので、文字についての説明が欠かせない。特に漢字とちがいで生まれた「女手」、平仮名のことを丸暗記するのは外国人にとって大変難しいことである。

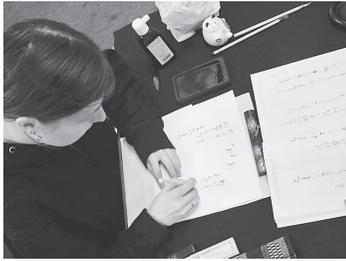
「形をとりにくいため、かな文字を書くことを苦手に思っている日本人も少なくないようである。日常、もっともよく使う平仮名の書法は、漢字の草書法から発展したから奥が深いのだが、草書法を教わる機会はほとんどないからであろう。日本人にとって、かな文字の指導は容易ではないようだ。」¹²

平仮名が草書体の漢字から生まれたことを、多くの日本人も知らないようだが、私の考えでは平仮名の字母に触れるのは仮名を理解し、美しく書くための大事な一歩である。学習者の母語の文字体系がアルファベットであれば、他のアルファベット国の文字と共通点が多くあり、その国の字でもだいたいバランスよく書けるはずだが(ALPHABET (ENG)・АЛФАВИТ (RUS))、平仮名は同じ文字として認識しにくいいため戸惑いが大きくなる。平仮名を教えることと同時に字母を教えることによって、字はどうしてそういう形になったか納得させたり、文字の中のニュアンスにも気付かせたりすることができるであろう。たとえば「す」の結びはどうして丸くないか、「な」の点をどうして左の部分より上に書いてはいけないかということ、「す」と「な」の字母の「寸」と「奈」の草書体を見せたら(す→寸の2画目と3画目を続けて書き、な→右の点は奈の3画目の右払いの部分である；次頁の図を参照)、難しく見える半面、理解も進み、かえって文字が書きやすくなるのではないか。

「外国人が初めて学ぶ日本の「かな」文字を短期間に要領よく習得できるような教材は、日本人にとっても有効だろう。しかし、「短期間に・要領よく」といいながら、文字を書く能力というのは、年齢・経験とともに発達、成長していくので、ゆくゆくは日本の伝統的な書法芸術にもつながり得る可能性を残した学習でありたい。実用には硬筆書法なのだが、毛筆とのちがいは筆圧の変化がほとんどないことである。「ゴチック体」などの書法学習だけでは、伝統的な毛筆書法とのつながりが生きてこない。回り道かもしれないが、やはり毛筆書法の体験を併用すれば、筆の毛の微妙な働きや、筆の抑揚による筆圧のコントロールが、「かな」文字の字形の合理性に影響している事実が理解し

12 松本宏揮 2009「書法教育の現場からの報告 かな文字の字形①～⑨」出典雑誌不明

やすくなる」¹³。



草書体の「な」(奈)

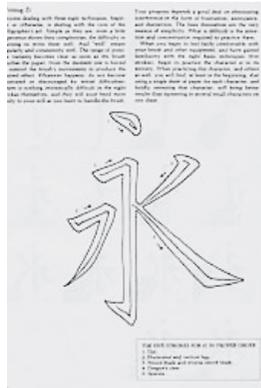


草書体の「す」(寸)

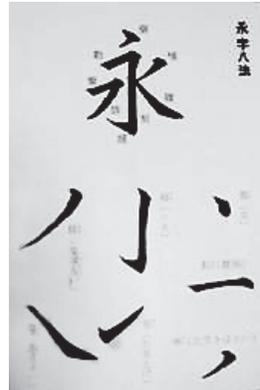
仮名の続け字の練習をしている留学生（作品例を資料で参照）

5.2 毛筆の入門

外国人には書道用の筆を使う経験がまったくないため、まず筆に慣れさせる練習が必要である。今までに手に入れた書道入門の参考書は、永字八法の導入からはじめているのがほとんどである（永字八法とは漢字の「永」の字には書に必要な技法8種がすべて含まれているということを表した言葉）。



14



15

しかし今まであまり漢字・書道文化と接したことがない外国人にとって、上の図にあるような練習はかなり難しいことである。また西洋人の場合、同じような作業を繰り返すのが苦手であるため、すぐに興味がうすれがちになるのではないかと判断して、半紙に平仮名を書かせることにした。理由は漢字より見慣れている平仮名の方が親しみやすく、字の形もある程度まで把握ができるからである。そして永字八法のように毛筆で書く場合、平仮名にもほとんどの基本的な技法が含まれているので、かな文字を書いているうちに、飽きずに筆に慣れるのではないかと予想した。たとえば「あ、お」という字では横線・縦線・左払いの練習ができる。また「え、う」の場合、自然に点の打ち方も

13 松本宏揮 2009「書法教育の現場からの報告 かな文字の字形①」出典雑誌不明

14 Ryokushu Kuiseko. 1988. "Brush Writing—Calligraphy Techniques for Beginners—". Kodansha International Ltd.

15 大貫思水 1958『書道実習講座 漢字編 入門から師範まで』鶴書房

覚えられるはずである。五十音の文字を書きながら、少しずつ筆に慣れて、自然に抑揚の調整もできるようになるはずである。

実際に留学生に教えるときに以上の仮説を試したところ反応がよく、字母の話をしながら長時間を飽きずに書かせることができた。また平仮名の字母の説明に対して、留学生が興味津々の様子で他の字の字母も当てようと積極的な姿勢を示した。お手本にしばらくられないように、手本をあたえずに書かせた。一回書いた後で、形を整えるように字母を参考として見せながら、筆法に関して一言アドバイスをすることにした。

字母を取り入れたおかげで、「ひらがなは どうしてこんな形をしているの」という疑問が解けて、文字の中のバランスと全体的な形が把握しやすくなったのは明らかであった。字の元来の形を知ることによって、より美しく書くという意識が養われるのではないか。平仮名を書かせ、ある程度筆に慣れたら、今度こそ永字八法を取り入れれば、効果的であると判断した。

レッスンの様子



平仮名を書いている留学生の様子



上の字：最初に書いた「あ」
下の字：説明後に書いた字母の「あ」

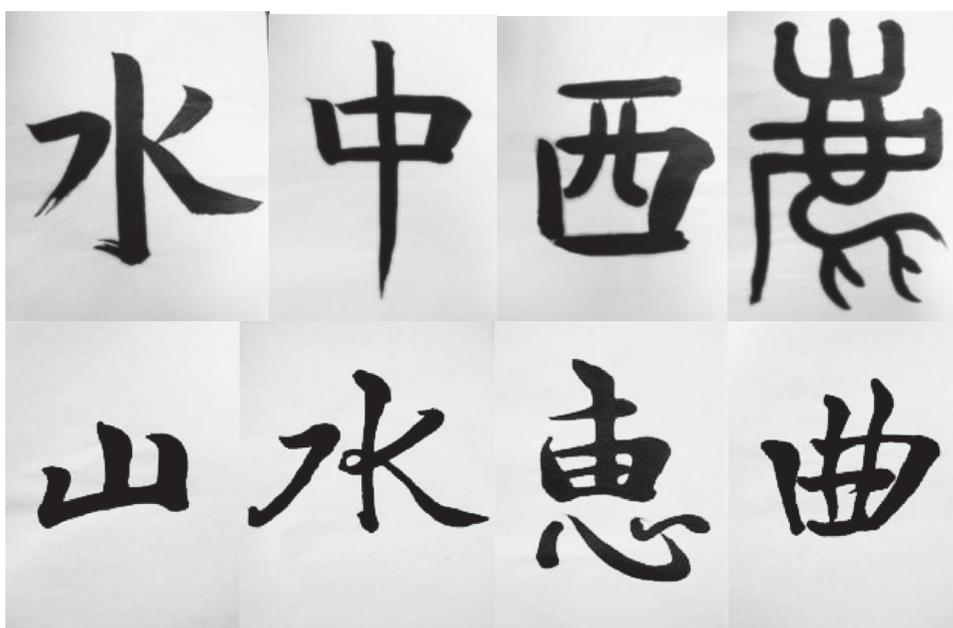


自分から選んだ書体と文字を書いている留学生の様子（鹿（篆書）、和（行書））

平仮名編を終えたら、4項に述べた指導法を活かして、さまざまな書体に触れることにした。書道に用いる道具の扱い方や文字の説明、いろいろな表現の仕方について説明をしながら、好きな書体と文字を選ばせて自由に書かせた。手本にしばられないように自分のイメージで書かせ、書いた後に一言アドバイスをあたえて形を整えるという指導を試したところ反応がよくて、手本と比べる時のがっかり感を避けられ、逆に自分の書いた物を見比べて自分の成長に気づき喜んでた。以下に指導した外国人生徒の作品の例をまとめた。全員、奈良教育大学の文部科学省の国費留学生であり、1年間、日本文化・日本語というプログラム（日研生）の枠内で日本にやってきた。

少人数でレッスンをおこなったので、一人一人の作品をきちんと見る事ができて、スムーズに進行したが、大人数の場合ではさらに指導方法を工夫しなければいけないであろう。それは実践企画とつながる次の課題である。

指導した留学生の作品の例（ポーランド、インドネシア、アゼルバイジャン、ベトナム）
学習期間：2ヶ月間（残りの一覧、資料④を参照）



5.3 硬筆篇：美しい文字を書くのを妨げるもの、その克服の指導

小さい頃から日常生活上でひらがな、カタカナ、漢字と接してきた日本人とはちがいで、外国人にとっては日本の文字を努力して覚えた結果であるので、かんちがいして覚えてしまうことが当然ある。だから外国人にお習字を教える前に（硬筆・毛筆いずれも）、書く内容を確認する必要があることはいままでもないが、実際に文字を正しく覚えたかどうかだけではなくて、文字の変化を理解したかどうかを確認すべきであろう。そうしないと、文字の構成に対するかんちがいが深まるにちがいない。

例を挙げると、外国人は「雨」という字を習ったら「雨」の字で跳ねた部分を意識して、雨冠のある字を書くときにも、右足を跳ねて書くケースが多い。つまり同じ文字として認識してしまうので、跳ねない部分を跳ねてしまうだけではなくて、大きさの変化も十分に理解できない。自分自身の経験もふまえて、いくつか似たようなケース、つまり一見ただけでは分からないまちがいをピックアップしてみた。以下のようなものである。

雨・電→冠になる場合、右は跳ねなくなるのに、気づかない

向・奥；可・歌→同上

良・退；矢・知→単独の文字から複雑な文字の一部になる場合、跳ねた部分を止めるのに、単独のときと同じく書く

以上の、日本人から見たらミスと思われることの主要な原因として考えられることは、教えている側における文字に関する説明不足や不注意と、習っている側の杜撰さであろう。確かに外国人はある程度まで書けたらいいだろう。しかしより美しい字を書けるように指導するときに、以上に述べたようなミスがあれば、早めに発見して直すことに越したことはない。

また外国人の場合、母国で日本語教育を受けている中で筆書きの文字や手書きの文字を見る機会がほとんどないため、教科書やテキストの活字が字形の基準になってしまう。日本の活字、いわゆる明朝体は独自のデザインを施したものだから、文字の元の姿をたどってみたらとんでもない字であることが分かる。しかし外国人にとってはそれでも活字がモデルになってしまう。

手書きでも活字を真似て書いてしまうせいで、次のような書き方が見られる（資料③を参照：N.さんの字）。手書きで跳ねないところを跳ねて書く→七・四・西・酒；「文字の中で一箇所を広げて書く」というルールに対して抵抗を感じる→五・事（活字の場合、そのルールは共通しない）。

活字の場合、偏と旁でできている文字では偏に変化が見られるが、単独文字から旁になった部分には変化がほぼ見られないため、字の中のバランスが理解しにくくなっているのではないか。（木・交→校、矢・豆→短）

そういう活字を真似る癖を直す方法として考えられることとして、「九成宮醴泉銘」などの古典の文章で習う字を探し、それを見せながら手書き文字の特徴について説明を加えるという方法がある。そうすればとても分かりやすいだろう。また筆書きの文字と活字をじっくりと観察させ、実際に書かせて、ちがいについて考えてもらう。

5.4 硬筆の学習手段をめぐって。みんなの日本語初級Ⅰ漢字について

お断り：以下に述べる漢字の順番などの指導方法は、すべて筆法（どうしたら書きやすくなるのか）を優先したものである。

基本的な教科書『みんなの日本語初級Ⅰ』に合わせ、そこに出てくる順番と漢字と、さまざまな漢字の練習を載せている。実用的な面では（読み方、使い方、筆順など）かなり分かりやすくして便利であるが、漢字の構成についての説明が乏しく、漢字の部首や旁、あるいは文字中のバランスについてきちんとした説明がない。文字の書き方が説明されている時には大きめの活字の文字しか載ってないため、手書き文字のニュアンスがつかみにくい。この教材を使ったら正しい字を書けるようになるかもしれないが、活字

だけを見て美しい字が書けるようになるのだろうか。さらに漢字が出る順番は教科書に出る言葉次第であるため、筆法から見ればかなり不自然な順番が見られる。たとえば「読」と「話」はユニット9に出ているが、その漢字の部首を務めている「言」という字はかなり後の方、ユニット16に出ている。また「心」という字が取りこまれていないのに、「思」「意」「窓」という難しい字が出てくるなどの問題がある。

以下の表は、『みんなの日本語初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）の中で学習する漢字の一覧である。便宜上、漢字の順番は多少異なっている¹⁶。

一年で学習する漢字 (1) 二年で学習する漢字 (2) 三年で学習する漢字 (3) 四年で学習する漢字 (4) 五年で学習する漢字 (5) 六年で学習する漢字 (6) (*寝・奥→中学校で学習する字)

ページ	漢字	ユニット『みんなの日本語初級Ⅰ』対応課
27	日 月 火 水 木 金 土 山 川 田 (1)	1 (5課まで)
31	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 円 (1) 万 (2)	2 (5課まで)
35	学 生 先 本 中 人 (1) 会 社 国 (2) 員 医 者 (4)	3 (5課まで)
39	今 朝 昼 時 分 半 午 前 後 毎 何 (2) 晚 (6) 休 (1)	4 (5課まで)
43	行 来 週 自 電 (2) 校 (1) 去 駅 動 (3) 年 車 (1)	5 (5課まで)
51	高 新 古 黒 (2) 安 (3) 大 小 青 白 赤 (1)	6 (10課まで)
55	上 下 子 手 (1) 好 (4) 主 飲 物 (3) 父 母 肉 魚 食 (2)	7 (10課まで)
63	近 間 外 (2) 右 左 男 女 犬 (1)	8 (10課まで)
67	書 聞 読 話 買 婦 友 (2) 見 (1) 起 (3) 達 (4)	9 (10課まで)
75	茶 紙 画 店 語 (2) 酒 写 真 (3) 映 (6) 英 (4)	10 (10課まで)
79	送 旅 習 勉 (3) 切 教 強 (2) 貸 (5) 借 (4) 花 (1)	11 (15課まで)
83	歩 売 作 (2) 待 使 (3) 立 雨 入 出 (1) 止 (2)	12 (15課まで)
85	明 広 多 少 長 (2) 暗 短 悪 重 軽 (3) 早 (1)	13 (20課まで)
87	便利 (4) 元 親 地 (2) 有 鉄 仕 事 (3) 名 気 (1)	14 (20課まで)
91	東 西 南 北 京 夜 理 曜 (2) 料 (4) 口 目 足 (1)	15 (20課まで)
99	降 (6) 言 知 同 思 方 (2) 寝* 終 漢 (3) 字 (1)	16 (21課まで)
103	図 楽 (2) 館 銀 住 度 服 着 持 (3) 町 音 (1)	17 (22課まで)
107	春 夏 秋 冬 道 体 (2) 堂 建 (4) 病 院 運 乗 (3)	18 (23課まで)
111	家 内 兄 弟 姉 妹 海 計 (2) 族 (3) 奥*	19 (24課まで)
115	部 屋 開 歌 意 味 (3) 室 考 (2) 窓 閉 (6) 天 (1)	20 (25課まで)

16 元々の表は資料①を参照

5・6画の部首の漢字																									
玉たまへん	穴あなかんむり	生うまれる	田た	田たへん	白しろ	目め	立たつ	禾のぎへん	矢やへん	示しめすへん	疒やまいだれ	艸くさかんむり	糸いとへん	耳みみ	羽はね	老おいかんむり	行ぎよう	自みずから	西にし	肉・月にく					
理	窓	生	田男画	町	白百	目真	立	秋	知短	社	病	花茶英	紙終	聞	習	者考	行	自	西						
7・8画の部首の漢字																									
貝かい	見みる	車くるま	車くるまへん	赤あか	足あし	人しんによう	言げん	言ごんべん	走そうによう	里さと	酉とり	邑・卩おおざと	雨あめ	雨あめかんむり	金かね	金かねへん	青あお	門もん	門もんがまえ	阜・阡ござとへん	長ながい				
買貸	見親	車	転軽	赤	足	週近達送運	言	語話読計	起	重	酒	部	雨	電	金	銀鉄	青	門	間開閉	院	長				
9・11画の部首の漢字																									
音おと	食しよく	食しよくへん	高たかい	馬うま	馬うまへん	魚うお	黒くろ																		
音	食	飲館	高	馬	馬	魚	黒																		

部首別に並べてみたら、部首は単純なのに、文字自体は画数が多く、書きにくい字も出たので、更に工夫が必要なのが発覚した。たとえば「はらいぼう」という一画の部首できている「乗」と言う字である。というわけで部首別に順番を変えることだけで学習を楽にするというのは難しいので、新たな工夫が必要であることが分かった。

自然な順番を考えている中で、部首をこだわり過ぎると、部首は画数が少なくて簡単でも、その部首を用いる複雑な文字が先に出てしまう場合がありえるので（人偏→働）、日本の小学校で学習する順番を参考にし、今度は学年別に別けられている字の中で部首のことも考慮し、順番を考えてみた。

徐々に難易度を上げ、並べてみた。同じ部首の字を学年など関係なくまとめる（休、体、作）。後ほど偏や旁として出てくる単独文字を先に教える（言→語）。筆順と画数をこだわる必要はないであろう。

日本の小学校で学習する順番（※『みんなの日本語初級Ⅰ』に出てくる漢字のみ）：

1年	日 十 上 目	月 百 下 足	火 千 子 字	水 円 手 町	木 学 左 音	金 生 右 天	土 先 男	山 本 女	川 中 犬	田 人 見	一 休 花	二 校 立	三 年 雨	四 車 入	五 大 出	六 小 早	七 青 気	八 白 名	九 赤 口
2年	万 自 友 親 秋	会 高 茶 地 冬	社 新 紙 東 道	国 古 画 西 体	今 黒 店 南 家	朝 父 語 北 内	昼 母 切 京 兄	時 肉 教 夜 弟	分 魚 強 理 姉	半 食 歩 曜 妹	午 近 止 思 海	前 間 売 言 計	後 外 作 知 室	毎 書 明 同 歌	何 聞 広 方 考	行 読 多 凶	来 話 少 楽	週 買 長 春	電 帰 元 夏
3年	員 使 病	医 暗 院	者 短 運	去 悪 乗	駅 重 族	動 軽 部	安 有 屋	主 鉄 開	飲 仕 意	物 事 味	起 終	酒 漢	写 館	真 銀	送 住	旅 度	習 服	勉 着	待 持
4年	好 達 英 借 便 利 料 堂 建																		
5年	貸																		
6年	晚 映 降 窓 閉																		

以上の順番を参考にして3つの段階に別けた。順番の提案は以下のようである。

1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7
一	口	大	日	名	小	作	売	南	店	近	聞	明	夏	楽	員	有	酒	服	軽	借	閉
二	人	犬	白	田	赤	自	読	茶	少	道	兄	朝	前	春	去	開	漢	院	短	便	晚
三	火	天	百	町	子	書	今	北	歩	週	元	父	電	秋	主	事	度	持	送	利	映
十	九	水	早	男	字	買	会	京	母	姉	親	昼	高	弟	住	着	屋	物	運	料	降
土	七	手	車	目	学	画	外	方	毎	妹	新	友	紙	強	味	習	病	起	乘	英	窓
上	六	中	月	見	花	西	多	万	海	内	体	冬	切	室	部	安	医	飲	重	堂	寝
下	左	木	青	生	立	言	古	分	黒	肉	長	夜	理	考	暗	写	族	館	勉	好	建
千	右	本	円	先	音	計	午	来	魚	凶	地	行	知	教	真	待	旅	終	動	達	貸
八	四	休	山	入	年	話	半	広	時	国	社	後	心	歌	仕	者	馬	悪	銀	貸	
川	五	校	出	女	足	語	同	止	曜	間	東	食	思	家	使	駅	意	鉄			

以上の順番に従い、楷書で一番美しいとされる欧陽詢の字を集めて並べてみた¹⁸。見だせない漢字についても、欧陽詢風に自ら筆で書いてみた。筆で書いた字形を習わないといけないので、できるだけ古典での美しい楷書の字を探した。『みんなの日本語 初級Ⅰ』で出てくる字をすべて別シートに貼付け（補充した字を含め）、参考書資料に仕上げた¹⁹。

字の形や仕組み（単独文字か偏と旁で出来ているか）を考え、簡単な手の動きから入って、書くポイントやコツを教えながら、難しい字へ進むという方針である。また単独文字から偏・旁への変化を注意し、当該の漢字が出てくる順番を考慮した。なるべく共通する要素が入っている字をまとめて出したほうが効果的であろう。（大犬；上下など）

「九成宮醴泉銘」でよく見られる特徴が含まれた主なコツを、以下のようにまとめた。

コツの一覧

1. 画と画の間に空間をとる
2. 同じ方向への画はほぼ平行に書く
3. 一ヶ所を広げて長く書く（二画目が多い）
4. 同じ方向への画は同じ空間を取って書く
5. 中心からの左右の横線の長さは均等に書く
6. 文字の「頭」より「脚」の方を長く書く
7. 中心をしっかりとらえて書く
8. 文字の中心に対して左右の張り出しを均等に書く
9. 向き合う縦線がある横に長い字は、向き合う縦画を下にしぼり気味に書く
10. 6度ぐらいの右上がり気味で書く

指導の例は以下のとおりである。

第①章 一 二 三 十 土 上 下 千 八 川



一 二 三 → 文字は左から右へという大事なルールを覚えさせる



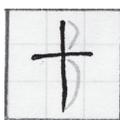
やや右上がりを書く・画と画の間に空間を取る。同じ方向への画はほぼ平行に書く



一ヶ所を広げて（長く）書く（多く二番目）・同じ方向への画は同じ間隔に書く

18 欧陽詢 1987『中国法書選 31：九成宮醴泉銘』二玄社；欧陽詢 1989『中国法書ガイド 29：皇甫誕碑』二玄社；欧陽詢 1998『中国法書ガイド 30：化度寺碑・温彦博碑』二玄社を参考とした。

19 資料②を参照



十 土 → 右に引っ張る手の動きに真ん中でヨコ線と交わるタテ線を加えるルール：文字を左から右へ、上から下へ書く



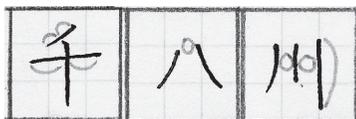
中心からの左右のヨコ線の長さは均等に書く・文字の「頭」より「脚」の方を長く書く



上 下 → 以上に出たこつを含むので、注意しながら書く



中心をしっかりにとらえて書く



千 八 川 → 交わった横線と縦線の他に斜めに書く
左払いが加わる文字の中心に対して左右の張り出しを同じにする（八）

以上の例と同じように章に分け、こつの一覧を使って指導する。各文字の部首と筆順を確認しながら指導する形である。

第②章 上の点は文字の中心を決める。：口 人 火 九 七 六 左 右 四 五
「七」と「四」の手書きの場合、活字とちがってはねない部分に注意をすること。またそこで画の終わり・途中の基本的な書き方について確認すべきである（とめ、はね、はらい、おれ、まがり）。

第③章 「へん」と「つくり」のバランス。：大 犬 天 水 手 中 木 本 休 校
偏と旁でできている文字の中のバランスに注意をさせる。

第④章 同じ方向への画は同じ間隔を取って書く。：日 白 百 早 車 月 青 円
山 出

第⑤章 単独の文字から偏への変化に注意。：名 田 町 男 目 見 先生 入
女

第⑥章 かんむりの下で空間を作る。：小 赤 子 字 学 花 立 音 年 足 気
金 雨

5.3項で述べたように、活字を基準としてとんでもない手書きの字をする人がいるが、それを早めに発見するべきである。個人差があるので、特に活字の影響が大きいと考えられる字をピックアップし、それを鉛筆で書かせたら簡単に発見できると思われる。

5.5 決めた内容を留学生に教えてみて気付いたことについて

奈良教育大学に在学している日本文化・日本語研修留学生（国籍：インドネシア；女性；右利き；国籍：ポーランド；女性；右利き；国籍：アゼルバイジャン；女性；右利き）に、以上に述べた第①～③の内容をいつも通りに書いてもらった。その後に説明を加え、もう一度同じ内容を書いてもらった。意識せずに最初に書かれたものを分析してみた。特にまちがった字を書いたというようなミスはなかったが、美しい形を追求することになると、気になったところは以下の通りである²⁰。

- 画と画の間に空間が足りない（二 三）
- 全体的に文字の頭より脚が短い（十 千 人）
- 画数が増えるにつれて右上がりが増える（六 千 上）
- 左右に均等の文字の場合、右の方にはみ出ている
- 折れを丸く書く（五 口）
- 筆順があってない（上→横線を先に書く；右→左と同じ順番で書く；九→左払いを先に書く）
- とめるべきところをはねるケースと、その逆がある（六の右足；四の中の左足）

全体的なイメージを簡潔に言えば、字形を意識せずなんとなくノートの四角い升目に入るように書かれている。偏と旁でできた字のバランスが特におかしい。筆順も乱れている。しかし一番気になったのは「手で書いた活字形」というイメージが強かったことである。やはりどんな形が美しいか、どう書けば美しく見るとかいう戸惑いがあったようである。

自ら作った古典「九成宮醴泉銘」に基づいた参考書を見せながら、基本的なこつの説明をすると、次のレッスンまでにとっても上手に書けていた。しかし時間が経つと忘れていく傾向も見られたので、やはり日頃のトレーニングが必要である。

外国人が書いた字の中には筆順がまちがったもののがかなり見られるが、それは字を書くことに支障がなければ、ある程度目をつぶってもいいであろう。しかし字を書くときの全体的な流れとして、たとえば下から上に書くなど、あまりよろしくない癖があれば注意すべきである。

それよりも字体の問題の方が深刻であろう。日本の漢字教育においても字体を巡る問題が大きくなりはじめた。1992年に大蔵省印刷局から刊行された「常用漢字表・現代仮名遣い」の前書きにある「明朝体活字と筆写の楷書との関係について」は、個々の漢字の字体を明朝活字のうちの一つを例に用いて示している。そこに「このことは、これによって筆写の楷書における書き方の習慣を改めようとするものではない。字体としては同じであっても、明朝体活字の形と筆写の楷書の形との間には、いろいろな点でちがいがある。それは印刷上と手書き上のそれぞれの習慣の相違に基づく表現の差と見るべきものである」とある。楷書の標準とする際には点画の長短・方向・曲直・つけるか/はなすか・とめるか/はねるか等については必ずしも拘束しないものがあるとして、このような手書き字形を一般では「許容の形」といつてきた。というわけで、いつのまにか活字のもとになるはずの「当用漢字字体表」のなかにある表に示してある形のまま

20 留学生の手書きの字は資料③を参照

書くのがよいのだという風潮になってしまった。

常用漢字表の記述によれば、漢字を手で書く時には活字の形をこだわらず、ある程度自由に書いてもまったく問題ないはずである。しかしおかしなことに印刷字形のモデルとして手書きで書かれた「当用漢字表字体表」が標準になってしまっている。現代の国語教育においては「正しく書かれた字とは何か」という評価の基準が乱れており、新聞で取り上げられるようになるほど世間の注目を集めている問題でもあると考えられる。

国語教育において字体の基準が乱れている状況の中で、日本語教育における文字学習にもネガティブな影響があたえられる。しかし外国人の場合、書いた字は教科書の字とちがって受験で減点される恐れがないので、「教科書体」というフォントにしばられる必要がなく、活字の形をまねずに書きやすさを優先させるべきであろう。

まとめ

日本の文字体系はアルファベットなどちがいが、漢字、平仮名、カタカナを含めて、かなり複雑であるため、外国人の日本語学習者にとってはかなり大変である。しかし大変である事にもかかわらず、日本の文字学習を楽にするための特別な対策などが見られない。というわけで日本語を学習する外国人の中には「漢字アレルギー」の人が増えつつある。それは外国人を対象とする日本語教育の大きな課題である。外国人の日本語学習者を仮名、漢字文化に親しませるには、文字学習段階に書道教育の導入が近道ではないかと判断して私はこの研究にとりかかった。

日本における書道教育の実情を調べたり、関連資料を集めたり、自分自身の書道学習の経験を活かして周りの留学生に実際に書道を教えたりして、自分の仮説が正しいかどうかを確かめた。少人数ではあったが、文字学習の一環として書道のレッスンに対して常に高い関心をもち、字をより綺麗に書けることをめざし、ひらがな、カタカナの字母、書体のちがいが、成り立ちにも興味津々の様子を示した者もいた。母国の日本語学科では学習できないという点で、毛筆と墨を使ったレッスンばかりでなく、硬筆で美しい字を書く方法というレッスンも好評であった。

今の時点では少人数の学習者しか指導していないので、まだ実践の一手手前というべき状態であるが、本論文の調査結果とその基礎として据えられた指導方法を、これからの自分の実践につなげていきたい。実践につれて新しい課題も見えてくるであろうが、その課題の解決対策を練りながら徐々に研究を深め、より効果的な日本文字学習アプローチを目指し、書道の指導を活かした独自の指導方法を磨いていきたいと考える。

外国で実践される場合には、国によって事情が異なるだろうが、書道道具の入手が難しいという国もあり、そうなるとう毛筆の練習ができる回数に限られる。しかし硬筆を実践させるには、普段使っている鉛筆や万年筆、ボールペンなどが十分に使えるので何も支障をきたすことはないであろう。

外国の日本語学科のみならず、日本における各種の「日本文化センター」などの国際交流機関では外国人向けの書道レッスンを実践できたら、日本文化を紹介し、日本のことや日本語学習に対して興味づけられ、より多くの人々に、日本ならではの独特な文字文化に親しませることができるのではないかと。

参考文献

1. David Harris. 2005. “*The Art of Calligraphy—A practical guide to the skills and techniques—*”. DK ADULT
2. 新矢麻紀子、高田亨、古賀千世子、御子神慶子 1993 『みんなの日本語初級I』スリーエーネットワーク
3. 松本宏揮 2006 『書法教育の実践』共同精版印刷株式会社
4. 福光敬子 2005 『留学生のための書道 入門篇』大阪外国語大学
5. Project YAMATO 2008. 2008 『奈良教育大学 平成20年度学生企画活動支援事業プログラム Japanese Calligraphy in Melbourne 外国人への書道の指導 報告書』
6. Ryokushu Kuiseko 1988. “*Brush Writing—Calligraphy Techniques for Beginners—*”. Kodansha International Ltd.
7. 村上翠亭 1985 『かなのレッスン1～5 入門編』二玄社
8. 宮崎葵光 1986 『草書のレッスン1～3 入門編』二玄社
9. 欧陽詢 1987 『中国法書選31：九成宮醴泉銘』二玄社
10. 欧陽詢 1989 『中国法書ガイド29：皇甫誕碑』二玄社
11. 福光佐今 1999 『文字造形の一考察 九成宮醴泉銘』日本書芸院
12. 欧陽詢 1998 『中国法書ガイド30：化度寺碑・温彦博碑』二玄社
13. 伏見冲敬編、村上翠亭編 1984 『書法教程 古典に学ぶ』角川書店
14. 松本文子編 1998 『神龍半印本で学ぶ 手本蘭亭序』教育図書株式会社
15. 松本宏揮 2009 『書法教育の現場からの報告 かな文字の字形①～⑨』出典雑誌不明
16. 日本ペン習字研究会編 『硬筆テキスト1』日本ペン習字研究会
17. 藤原鶴来編 1985 『書源普及版 新書道辞典』二玄社
18. 井上千圃 1991 『書道叢書28 漢字とかなのくずし方』文海堂
19. 永田作治、柘植昌汎 1984 『書写指導の基本 教師のためのベストライブラリー 40』第一法規出版
20. 秋元梢風 1995 『初級技法講座17 書道の道具の使い方』美術出版社
21. 大貫思水 1958 『書道実習講座 漢字編 入門から師範まで』鶴書房
22. 前田雅山 1994 『小学習字の手本』文進堂
23. 大蔵省 1992 『常用漢字表・現代仮名遣い』

資料

① 『みんなの日本語初級I』（スリーエーネットワーク）の中で学習する漢字の一覧

ページ	漢字	ユニット『みんなの日本語』対応課
27	日 月 火 水 木 金 土 山 川 田	1 (5課まで)
31	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 万 円	2 (5課まで)
35	学 生 先 会 社 員 医 者 本 中 国 人	3 (5課まで)
39	今 朝 昼 晚 時 分 半 午 前 後 休 毎 何	4 (5課まで)

43	行 来 校 週 去 年 駅 電 車 自 動	5 (5 課まで)
51	高 安 大 小 新 古 青 白 赤 黒	6 (10 課まで)
55	上 下 父 母 子 手 好 主 肉 魚 食 飲 物	7 (10 課まで)
63	近 間 右 左 外 男 女 犬	8 (10 課まで)
67	書 聞 読 見 話 買 起 婦 友 達	9 (10 課まで)
75	茶 酒 写 真 紙 映 画 店 英 語	10 (10 課まで)
79	送 切 貸 借 旅 教 習 勉 強 花	11 (15 課まで)
83	歩 待 立 止 雨 入 出 売 使 作	12 (15 課まで)
85	明 暗 広 多 少 長 短 悪 重 軽 早	13 (20 課まで)
87	便 利 元 気 親 有 名 地 鉄 仕 事	14 (20 課まで)
91	東 西 南 北 京 夜 料 理 口 目 足 曜	15 (20 課まで)
99	降 思 寝* 終 言 知 同 漢 字 方	16 (21 課まで)
103	函 館 銀 町 住 度 服 着 音 楽 持	17 (22 課まで)
107	春 夏 秋 冬 道 堂 建 病 院 体 運 乗	18 (23 課まで)
111	家 内 族 兄 弟 奥* 姉 妹 海 計	19 (24 課まで)
115	部 屋 室 窓 開 閉 歌 意 味 天 考	20 (25 課まで)

* (寝・奥→中学校)

② 欧陽詢の楷書に基づき作成した参考書の例 (九成宮醴泉銘、皇甫誕碑、化度寺碑)



③ 指導した留学生の手書きの字

N. さんの字 (インドネシア人) の字 BEFORE (説明の前)

一	二	三	十	土
上	下	千	八	川
口	人	火	九	七
六	左 ²	右 ²	四	五

AFTER (説明の後)

一	二	三	十	土
上	下	千	八	川
口	人	火	九	七
六	左 ^{1 2}	右 ^{1 2}	四	五

P. さんの字 (アゼルバイジャン、女性) BEFORE

四	七	酒	豆	短	西
木	校	切	雨	電	良
退	向	奥	歌	矢	知

AFTER

四	七	西	酒	豆	短
木	校	切	雨	電	良
退	向	奥	歌	矢	知

M. さんの字 (ポーランド、女性) BEFORE

四	七	西	酒	豆	短
木	校	切	雨	電	良
退	向	奥	歌	矢	知
一	二	三	十	土	

AFTER

四	七	西	酒	豆	
短	木	校	切	雨	
電	迎	向	奥	歌	
矢	知	良	退		
二	二	三	十	土	

- ④ 指導した留学生の作品の例（ポーランド、インドネシア、アゼルバイジャン、ベトナム）学習期間：2ヶ月間



- ⑤ 著者の卒業作品 左：九成宮醴泉銘の臨書 二尺×八尺（楷書）；右：創作「黄河」半切2枚（行書）

